令和５年度

Ⅰ　国　語

（９時00分～９時50分）

注　意

○　問題用紙は４枚（４ページ）あります。

○　解答用紙は**この用紙の裏面**です。

○　答えはすべて，解答用紙の所定の欄に，文，文字などで答えるもののほかは，**ア**，**イ**，……などの符号で記入しなさい。

○　解答用紙の　　の欄には記入してはいけません。

注意
字数指定のある問題の解答については、**句読点も字数に含める**こと。

一

次の1、2の問いに答えなさい。

1　次の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。また、═══線をつけたカタカナの部分を、漢字に直して書きなさい。

(1)　庭の草を刈る。
(2)　泣いている子を慰める。
(3)　外国の論文を翻訳する。
(4)　本の返却を催促する。
(5)　友人の相談にノる。
(6)　文化祭をモり上げる。
(7)　荷物をユソウする。
(8)　テンラン会に絵を出品する。

2　次の文章は、ある生徒が、職場体験を行った幼稚園に書いた礼状の一部である。――線をつけた部分**ア**～**オ**の中から、敬語の使い方が**正しくないもの**を一つ選びなさい。

先日の職場体験では、大変お世話になりました。園に伺ったときは緊張していましたが、先生方が優しく話しかけてくださったおかげで、積極的に活動することができました。先生方が笑顔で園児たちに接していらっしゃる様子を拝見して、将来、私も先生方のように生き生きと働きたいと思いました。また、体験の最後の日に園長先生が申しあげた「こちらが笑顔で働いていると、周りの人たちも笑顔になってくれるよ。」という言葉が、心に残っています。

ア　**イ**　**ウ**　**エ**　**オ**

二

次の詩と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

蝙蝠傘[注1]の詩　　黒田三郎

雨の降る日に蝙蝠傘をさして
濡れた街路を少女達が歩いている
少女よ
どんなに雨が降ろうとも
あなたの黒い睫毛が明るく乾いていますように
ああ
どんなに雨の降る日でも
そこだけ雨の降らない小さな世界
そこにひとつの世界がある
三階の窓から僕は眺める
ひっそりと動いてゆく沢山の円い小さなきれいなものを
そのひとつの下で
あなたは別れてきたひとのことを思っている
そのひとつの下で
あなたはせんのない買物の勘定[注2]をくりかえしている
そのひとつの下で
あなたは来年のことを思っている
三階の窓から僕は眺める
ひっそりと動いてゆく円い小さなきれいなものを

注1　蝙蝠傘：雨傘。　注2　せんのない：無意味な。

三階の窓から見下ろす「僕」の目が視覚的に捉えているものは、「［　Ⅰ　］」です。それは何も語らないけれども、「ひっそりと動いてゆく」その様子が、「僕」に傘の下の少女達の［　Ⅱ　］日常を想像させます。そのような「僕」の想像から、［　Ⅲ　］まなざしを感じ取ることができるのです。

1　［　Ⅰ　］にあてはまる最も適当な言葉を、右の詩の中から**十一字**でそのまま書き抜きなさい。

2　［　Ⅱ　］にあてはまる最も適当な言葉を、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　静かに移ろいゆく　　**イ**　変わらずに安定している
ウ　まばゆく輝いている　　**エ**　退屈でうんざりする
オ　めまぐるしく変化する

3　［　Ⅲ　］にあてはまる最も適当な言葉を、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　明るく爽やかな　　**イ**　あたたかく優しい　　**ウ**　悲痛で切ない
エ　情熱的で激しい　　**オ**　控えめでむなしい

4　この詩の説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　周りの人々の幸せを祈るような表現によって、人との関わりを大切にしながらたくましく生きていこうという決意を表している。
イ　「僕」と少女達の姿を対比することで、個人の生きる世界は他者に全く影響されることなく守られていることを強調している。
ウ　皆同じように蝙蝠傘をさして歩く人々の様子を表現することで、人間関係の複雑さや社会の生きづらさを比喩的に描いている。
エ　少女達一人一人を「あなた」と表現することで、蝙蝠傘をさして歩く人々がそれぞれの人生を生きていることを感じさせている。
オ　雨に涙のイメージを重ね合わせて、蝙蝠傘に隔てられた孤独で癒やされることのない個人の悲しみの世界を浮き彫りにしている。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある人いはく、人は慮りなく、いふまじきことを口疾くいひ出し、人の短きをそしり、したることを難じ、隠すことを顕し、恥ぢがましきことをただす。これらすべて、あるまじきわざなり。われはなにとなくいひ散らして、思ひもいれざるほどに、いはるる人、思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身果つるほどの大事にも及ぶなり。笑みの中の剣[注]は、さらでだにもおそるべきものぞかし。心得ぬことを悪しざまに難じつれば、かへりて身の不覚あらはるるものなり。

おほかた、口軽き者になりたれば、「それがしに、そのことな聞かせそ。かの者にな見せそ。」などいひて、人に心をおかれ、隔てらるる、くちをしかるべし。また、人のつつむことの、おのづからもれ聞えたるにつけても、「かれ離れじ。」など疑はれむ、面目なかるべし。

しかれば、かたがた人の上をつつむべし。多言留むべきなり。

（「十訓抄」より）

注　笑みの中の剣：うわべでは笑っていながら、心の内は悪意に満ちていること。

1　「いきどほり」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

2　次の会話は、本文について、授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。

Aさん　「この文章には、教訓が書かれているということだったね。どんな教えが書かれているのかな。」
Bさん　「言ってはならないことを軽々しく言ったり、人の短所や行動を非難したり、隠していることを暴露して恥をかかせたりするのは、どれも『［　Ⅰ　］』であると説明しているね。」
Cさん　「そうだね。自分では何気なく言った言葉について、言われた方は深く思いつめて悩んで、強い怒りをもつこともあると書かれているよ。」
Bさん　「言う方は気にしていない発言を、言われた方が気にしてしまうことは、私も経験があるから共感できるな。」
Aさん　「口が軽いことの影響も書かれているよ。あの人には話さない方がいいと思われて距離を置かれることもあるし、それに、［　Ⅱ　］こともあるということだね。」
Cさん　「つまり、この文章では、［　Ⅲ　］という教訓が述べられているんだね。」

(1)　［　Ⅰ　］にあてはまる最も適当な言葉を、本文（文語文）から**七字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　［　Ⅱ　］にあてはまる内容を、**三十字以内**で書きなさい。

(3)　［　Ⅲ　］にあてはまる最も適当な言葉を、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　不用意な発言が他者を傷つけるだけでなく自分にとっての不利益につながる場合もあるため、発言には慎重であるべきだ
イ　自分で言った言葉には責任をもつことができないため、発言するときは相手の気持ちを考えて失言を避けることが大切だ
ウ　基本的には軽々しく発言すべきではないが、時にはよく知らないことでも知っているふりをして話すことも必要になる
エ　人には誰でも包み隠していることがあり、それに一切触れないように話すことによりよい人間関係を築くことができる
オ　自分が思っていることを相手に伝わるように話すためには高度な技術が必要だが、その方法を身につけることは難しい

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（大久保慎吾は中学入学時からバスケットボール部で活動していたが、ひざの痛みにより練習が困難になった。慎吾は、医者や親にすすめられ、一年生の三月末にバスケットボール部を退部した。そのことが原因で、二年生に進級してからも落ち着かない気持ちが続いていた。ある日、一年生のときの担任だった辻井先生から声をかけられた。）

「退部してから、バスケ部の仲間には会った？」

「いや、なんとなく会いづらくて……。」

「そういわずに、たまには顔を見せてやったら。きょうの六時間目、三年生は臨時の学年集会だったんだけど、それがまだ長引いてるみたいだから、いまなら先輩と顔を合わせずに部の仲間と話せるよ。」

そう告げる辻井先生の顔には、滅多に見せないやさしい笑みが浮かんでいた。けれどぼくが驚いていると、すぐにその笑顔を引っこめて、「それじゃあ。」と職員室に入っていってしまう。

職員室の戸が閉められたあとで、ぼくはバスケ部のみんなが練習をしている体育館のほうを振りかえった。

体育館の床で、バスケットボールが弾む音が聞こえてくる。部活を辞めてまだ半月ちょっとしかたっていないのに、ぼくにはその音がやけに懐かしく聞こえた。

放課後の体育館を訪れるのは、退部のあいさつをしにいったとき以来だった。まだバスケ部のみんなと話をする決心がつかなくて、ぼくはこっそり体育館の中をのぞいてみた。

体育館の中では、バスケ部がすでに練習を始めていた。[注1]雅人も、[注2]バリーも、[注3]もっさんもいる。残りの部員は全員新入生だ。すごい、八人もいるじゃないか。これなら三年生が引退しても、部員不足に悩むことはなさそうだ。

雅人がおもしろいことをいったのか、一年生たちが笑いだした。雅人、愉快ないい先輩をしてるみたいだな。ぼくが退部する前は、新入部員の指導なんてめんどくさいとかいってたのに。

先輩らしく振る舞っている仲間の姿をながめているうちに、ぼくはたまらなく寂しくなった。もうこの放課後の体育館に、ぼくの居場所はない。

様子を見にきたりなんてしなければよかった。そう後悔しながら、[1]ぼくはその場を立ち去ろうとした。ところがそのとき、姿の見えなかったもうひとりの二年生部員の満[注4]が、ちょうど体育館にやってきた。用事があって遅れたんだろうか。満はまだ制服姿で、ぼくを見て驚いた表情を浮かべていた。

「やっぱり慎吾か。こんなとこでのぞいてないで、中に入ればいいのに。」

「いっ、いや、練習の邪魔をしちゃ悪いと思って……。」

「そんな気を遣うことないだろ。おい、慎吾がきてるぞ！」

満が体育館の中に向かって声をかけると、すぐに雅人が飛んできた。もっさんとバリーもそのあとから駆けてくる。

「慎吾、この薄情者！　たまには顔見せろよなあ。寂しいだろ！」

「ご、ごめん。けど、退部したのに練習に顔を出すのは気が引けて……。」

「水くさいこというなよ。とにかく中入れって。」

遠慮する暇もなく、ぼくは体育館の中に連れこまれてしまった。

体育館のステージにみんなと輪になって座ったものの、どんな話をしたらいいかわからず、ぼくはミニゲームをしている一年生たちを見ていった。

「新入部員、たくさん入りそうでよかったね。」

それからぼくたちは自分のクラスのことや最近のできごとについて話をした。ぼくがまだバスケ部にいたころの、練習前や休憩時間とおなじように。

なのに[2]ぼくは仲間たちとのあいだに、これまではなかった距離を感じていた。それはきっと、ぼくがみんなに隠していることがあるから。そしてみんながぼくに気を遣ってくれているからだ。その証拠に、ぼくの脚や退部のことには、だれも触れようとはしない。

しばらく話したところで、ふいに会話が途切れた。一年生がスリーポイントシュートを決めて歓声をあげた。ぼくがそっちに注目するふりをして、気まずさをまぎらわせていると、満が「慎吾。」と話しかけてきた。不安をこらえるような、硬い表情で。

「おまえの脚のことを聞いたときから、謝らないとずっと思ってたんだ。成長痛だろうなんて適当なことをいって、ほんとうに悪かった。あのときすぐに病院に行くようにすすめてれば、部を辞めなくてすんだかもしれないのに……。」

「えっ、そんなの謝ることないよ。ぼくだって、自分の脚が退部しなきゃいけないほどひどい状態になってるなんて思ってもいなかったんだから。」

慌ててそういいかえしても、満の顔は晴れなかった。満だけじゃなくて、ほかのみんなもおなじように沈んだ顔をしていた。

バリーがおずおずとぼくにいった。

「けどよぉ、慎吾、最近ずっとおれらのことを避けてたろ。だからやっぱそのことで怒ってんじゃないかと思ってよぉ。」

「誤解だよ！　ぼくがみんなと顔を合わせづらかったのは、ただ、バスケ部を辞めたことがうしろめたかったからなんだ。」

口にした瞬間に、いってしまった、と思った。うろたえているぼくに、バリーが首を傾げて聞きかえしてきた。

「なんでだよ。退部は脚のせいなんだからしょうがないだろ。うしろめたさなんて感じる必要ないじゃん。」

ほんとうのことを、正直に話さなくちゃいけない。たとえみんなに軽蔑されたとしても。そうしなければ、きっとこれからもみんなに、ぼくのことで責任を感じさせてしまう。

仲間たちの視線から逃れてうつむくと、ぼくはおそるおそるそのことを明かした。

「たしかに、脚のせいなんだけどさ。親とか医者に退部をすすめられたとき、ぼくははっきり嫌だっていわなかったんだ。続けようとしていれば、続けられたかもしれないのに。だからもしかするとぼくは、心の底でバスケ部を辞めたがってたのかもしれないって、そう思ってるんだよ。いくら練習してもみんなみたいにうまくなれないから、それがつらくて部活から逃げたんじゃないか、って……。」

言葉を終えたあとも、ぼくはみんなの反応が怖くてうつむいたままでいた。ぼくがびくびくしながら沈黙に耐えていると、満が最初に口を開いた。

「慎吾はそういうことはしないだろう。」

それはまるで、ぼくがなにかおかしなことをいったかのような口調だった。驚いて顔を上げると、満は明らかに戸惑った表情を浮かべていた。

雅人が「だよな。」と相槌を打ってぼくの顔を見た。

「おまえ、本気でそんなこと気に病んでたのかよ。おまえみたいに真面目で練習熱心なやつが、まだ頑張れるのに怪我のせいにしてあきらめたりするわけないだろ。」

バリーともっさんもしきりにうなずいていた。その反応を目にしたとたん、胸の底から熱いものがこみあげてきた。

正直、ぼくはみんなのことを疑っていた。あいつは怪我を理由にしてバスケ部から逃げた。そう思われているんじゃないかと想像して怖かった。

だけど、そんなことはなかったんだ。ぼくはずっと自分の本心を疑い続けていたのに、みんなはいまでもぼくのことを信頼してくれていたんだ。

[3]ありがとう、とぼくは心からみんなに感謝した。なにいってんだよ、と雅人が茶化[注5]すようにぼくの肩を揺さぶってくる。

「……もっとみんなとバスケをしてたかったな。」

みんなの顔を見ていたら泣いてしまいそうで、ぼくはステージの床を見つめてつぶやいた。退部から半月以上がたってようやく、[4]ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。

（如月　かずさ「給食アンサンブル2」より）

注1～注4　雅人・バリー・もっさん・満：二年生のバスケ部員。
注5　茶化す：冗談のようにしてごまかす。

1　[1]「ぼくはその場を立ち去ろうとした。」とあるが、慎吾がそのようにしたのはなぜか。説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　体育館の中からは二年生の部員の声だけでなく何人もの一年生たちの声がしたので、今日は訪問を遠慮しようと思ったから。
イ　体育館の中をのぞくと、自分の仲間だった二年生の部員と一年生たちが楽しそうにしていたため、入りにくさを感じたから。
ウ　体育館の中から聞こえる二年生の部員と一年生たちの笑い声が、バスケ部を辞めた自分を笑っているように感じられたから。
エ　体育館にいる二年生の部員みんなと話したいと思っていたが、満の姿がなく、部員全員がいるときにまた来ようと思ったから。
オ　体育館に入ったものの、自分は雅人のように一年生たちの世話を明るくこなすことはできないし、めんどうだとも思ったから。

2　[2]「ぼくは仲間たちとのあいだに、これまではなかった距離を感じていた。」とあるが、その理由を次のように説明するとき、［　Ⅰ　］、［　Ⅱ　］にあてはまる内容について、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

慎吾が仲間たちとのあいだに距離を感じたのは、バスケ部を辞めたことについて［　Ⅰ　］を感じており、それを感じている理由を仲間たちに言い出せずに隠しているからである。一方、もう一つの要因に、仲間たちの思いも挙げられる。今まで慎吾が自分たちを避けていたのは［　Ⅱ　］からだと、仲間たちは思い込んでいる。このことも、慎吾に距離を感じさせたのである。

(1)　［　Ⅰ　］にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から**六字**でそのまま書き抜きなさい。
(2)　［　Ⅱ　］にあてはまる内容を、**三十字以内**で書きなさい。

3　[3]「ありがとう、とぼくは心からみんなに感謝した。」とあるが、慎吾がなぜ感謝したのかを次のように説明するとき、［　　］にあてはまる内容を、**六十五字以内**で書きなさい。

慎吾は自分の本心を疑っていたが、自分の話に対するバスケ部の仲間の言葉や反応から、［　　］ことに気づいたから。

4　[4]「ぼくは自分のほんとうの気持ちに気がついた。」とあるが、この部分での慎吾の心情についての説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　自分はバスケ部を辞めたほんとうの理由を仲間に伝えたかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが消えつつある。
イ　自分は仲間と話ができなくて寂しかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちを解消するきっかけをつかんでいる。
ウ　自分は仲間と一緒にバスケを続けたかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちを解消するきっかけをつかんでいる。
エ　自分は仲間から真面目で練習熱心なやつだと思われたかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが強まっている。
オ　自分は自分の正直な思いを仲間にちゃんとわかってほしかったのだと気づき、ずっと感じていた落ち着かない気持ちが強まっている。

5　本文の構成・表現についての説明として最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　文章全体を通して比喩表現が効果的に用いられており、登場人物それぞれの思いや取った行動の違いが鮮やかに印象づけられている。
イ　回想的な場面が途中に挟まれることで、この日の出来事からだけではわからない主人公の内面の変化の理由が詳しく明かされている。
ウ　登場人物それぞれの考えが第三者の視点から客観的に描かれ、互いの気持ちのすれちがいが解消していく様子が明瞭に語られている。
エ　主人公の気持ちの変化の様子が直接的に表現されることは少ないが、美しい自然の描写に反映させて間接的に描き出されている。
オ　会話と主人公の内面が交互に描写されることで、主人公の心情が他者の言葉によって変化していく様子が丁寧に表現されている。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（1～14は各段落に付した段落番号である。）

1 本をリニア（線形）なものとして捉えるか、ノンリニア（非線形）なものとして捉えるか。これは大きな違いです。結論から言えば、読者は「ノンリニアな道具箱」としての書物に接すればよいのです。

2 たいていの物書きが同意すると思いますが、本はそもそも、最初から最後までリニア（まっすぐ）に読み通す必要はありません。冒頭から順番に読む必要もありません。順を追って、律儀に読み進まねばならないという思い込みは、ここで捨ててください。

3 そもそも、本とは適当に拾い読みするくらいでも、十分に役立つものです。長年経験を積んでくると、三〇秒ほどパラパラとページをめくれば、その本が自分にとって必要かどうかの判断はつきます。そして、必要だと判断したら、とりあえず最初から最後までページをめくってみます。

4 その速度は一定でなくてもよい。読んでいて面白いときは、じっくり腰を据えますし、そうでないときは速読です。それは「ながら」でも大丈夫。僕の場合、片方の手で家の二歳児の相手をしながら、もう片方の手で一冊読み終わるのに、本の種類にもよりますがだいたい三〇分未満です。

5 なぜそうできるかというと、文字通り「拾い読み」しているからです。本というのは、目分量で言えば四、五ページに一箇所くらい、それなりに重要なポイントが出てくる。そこをペンでマークしたり、ドッグイア[注1]をつけたりする。ゲームで言えば、フィールド上のアイテムを拾い上げていく要領で、ページを視覚的に一望し、そこから要点を拾ってチェックする。その際にひらめいたことは、そのページや本の扉に簡単にメモします。

6 そのとき、本の全体を把握する必要はありません。論旨をそこまで厳密に追わずに（もちろん追ってもよいですが）、むしろアイテムらしきものにパッパッと印をつけていく。ただ、重要な情報が急に出てくるケースもあるので、速読のときほど眼のセンサーの感度をあげたほうがよいでしょう。どのみち、自分にとって重要な本ならば再読することになりますから、見逃したアイテムはそのとき拾えばよいというスタンス[注2]でも構いません。

7 念のために言えば、早く読めるから偉いということはありません。一言一句もゆるがせ[注3]にしない学究的な読み方も、僕はまったく否定しません。ただ、読書を重々しく崇高な労働のように捉えるのは、たんにナンセンス[注4]でしょう。どれだけ偉い著者も、所詮われわれと同じ人間にすぎない。そう割り切って、僕は本と付きあっています。

8 もう一つ、読書において肝心なのは、すべてをまんべんなく理解しようと思わないことです。一冊の本のなかに、分かったような分からないような、あいまいなグレーゾーンがあるのは当然です。しかし、そこで引っかからずに、とりあえず最後まで読み進めてみる。その後でグレーな箇所に戻ると、意外にすんなり理解できることも多いのです。

9 要するに、[1]理解はしばしば遅れてやってくる。一冊の本のなかにも、理解の時差があると考えてください。分かるから○、分からないから×という単純なものではありません。

10 それに、一冊の本から得られる情報は、恐らくそれほど多くありません。一概には言えませんが、僕はおおむね二つか三つの新しい認識を得られれば十分――それくらいの歩留まり[注5]で考えています。あまり多くのことを一冊の本から吸収しようとしても、頭脳がパンクするだけです。

11 ただ、その必要最低限の「二つか三つ」（四つか五つでもよいのですが）のお土産をしっかりとつかんで、随時取り出せるようにしておかないと、読書から得られることはあまりありません。漫然[注6]と読み終わって、中身をすっかり忘れてしまっては、たいして意味はないでしょう。

12 では、どうやって「つかむ」のがよいでしょうか。几帳面な読者は、実際にカードを作って保存するかもしれません。僕も学生時代にはそのようなカード作りに挑戦しましたが、結局長続きしませんでした。このようなやり方には、性格的な向き不向きがあります。

13 試行錯誤の結果、今では本の扉のところに、その本のキーワードや個人的な思いつきを適当に書き散らすようになりました。いずれ本格的にその本を使うことになったとき、アイディアを追跡し「復元」できるようにマークやタグ[注7]をつけておくわけです。本がデータだとすると、個人的索引としてのマークやタグはメタデータ[注8]。メタデータの目印さえあれば、執筆の際にも十分役立つことに経験則で気づいたのです。

14 哲学者のジル・ドゥルーズ＆フェリックス・ガタリは、書物とは「『外』にはたらきかける小さな道具」のようなものだと言っています。[2]本とは冒頭からリニアに読み解くべきものではなく、そのつど必要に応じて内容を取り出せる、ノンリニアの道具箱です。ただ、道具箱がぐちゃぐちゃだと使いにくい。だから「この本にはこんな道具が入っていますよ」というタグ＝メタデータの表示が欠かせません。コンビニやスーパーと同じで、商品の管理はちゃんとしないと、すぐに取り出せなくなってしまう。だから、メタデータの書き込みによって、本を機能的な道具箱に改造してしまえばよいのです。

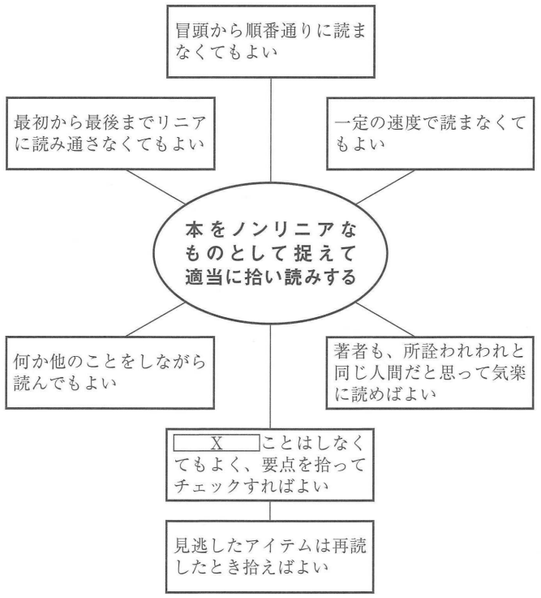
（福嶋　亮大「思考の庭のつくりかた　はじめての人文学ガイド」より）

注1　ドッグイア：本のページの隅を折ってつける目印。
注2　スタンス：物事に取り組む姿勢。
注3　ゆるがせにしない：いいかげんにしない。
注4　ナンセンス：無意味なこと。
注5　歩留まり：ここでは、全体に対する割合。
注6　漫然と：特別の意識や目的を持たずに。
注7　タグ：情報の意味づけや分類のための目印。
注8　メタデータ：データの意味について記述したデータ。

1 **3段落**の「とりあえず」の品詞を、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　感動詞　　**イ**　形容詞　　**ウ**　副詞
エ　連体詞　　**オ**　接続詞

2 次の図は、**1段落**～**7段落**に示されている筆者の考えについてまとめたものである。［　X　］にあてはまる最も適当な言葉を、本文の**1段落**～**7段落**の中から**七字**でそのまま書き抜きなさい。



3 「[1]理解はしばしば遅れてやってくる。」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを、次の**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

ア　一度読んであいまいにしか分からなかった箇所も、その先まで読み進めてから戻って再び読むと理解できることが多いということ。
イ　理解できるか理解できないかを単純に区別できる箇所ばかりではなく、あいまいにしか理解できない箇所も多くあるということ。
ウ　何が書かれているかすぐに理解できる箇所よりも、その先まで読み進めてから戻って読むほうが理解できる箇所が多いということ。
エ　本の著者も人間にすぎないので、一度読むだけでは分からず読み返して初めて理解できる箇所がどの本にも多くあるということ。
オ　何度も進んだり戻ったりするうちに理解できる箇所も多いので、書かれている順番通りに理解しようとする必要はないということ。

4 「[2]本とは冒頭からリニアに読み解くべきものではなく、そのつど必要に応じて内容を取り出せる、ノンリニアの道具箱です。」とあるが、筆者がこのように述べるのは、執筆のために本を使ったときに、本についてどのようなことに気づいたからか。**六十字以内**で書きなさい。

5 本文について説明したものとして最も適当なものを、次の**ア**～**エ**の中から一つ選びなさい。

ア　本をどのように捉えてどのように読むべきなのかという問題をはじめに提示し、続く部分では自分の本の読み方を具体例を挙げながら説明し、終わりの部分ではじめに提示した問題に答えている。
イ　自分の考える本の捉え方や読み方をはじめに示し、続く部分では自分の本の読み方を一般的に考えられている本の読み方と比較しながら説明し、本を自分に役立てるための方法も提示している。
ウ　本の捉え方や読み方というテーマをはじめに示し、続く部分では具体例を挙げながら自分の本の読み方を詳しく説明したうえで、たくさんの本の中から自分に役立つ本を探す方法を説明している。
エ　本の捉え方や読み方という話題をはじめに提示し、続く部分では本を読み進めながら自分に必要な情報を見つける方法を結論の根拠となるように具体的に説明し、終わりの部分につなげている。

6 次の会話は、本文を読んで、読書に対する考えについて話し合った内容の一部である。［　　］にあてはまる最も適当な言葉を、あとの**ア**～**オ**の中から一つ選びなさい。

Aさん　「読者は本をノンリニアなものとして捉えて読めばいいと筆者は述べているね。」
Bさん　「夏休みの自由研究のために自分が調べるテーマに関する本を読んだけれど、最初から最後までじっくり読んだから一冊しか読めなくて、研究も不十分になってしまったんだ。違う読み方をすればよかったかもしれないね。」
Cさん　「私は小説が好きでたくさん読むんだけれど、特に、好きな作家の作品の場合は、最初から最後までよく味わうリニアな読み方で楽しみたいな。」
Aさん　「なるほど。Bさんの意見も、Cさんの意見も、納得できるなあ。まとめると、［　　］。」

ア　筆者のように本を読むのが、効率的な読み方なのかもしれないね
イ　どんなときも同じ方法で本を読むことがきっと大切なんだろうね
ウ　最初から最後まで読み通すことが、やっぱり大切なことなんだね
エ　本を読む目的によってふさわしい読み方があるのかもしれないね
オ　ノンリニアに読んだ後でリニアに読む方法がよいかもしれないね

六　近年、「ユニバーサルデザイン」が推進されている。次の**【資料Ⅰ】**は、「ユニバーサルデザイン」の説明である。また**【資料Ⅱ】**は、福島県の十五歳以上を対象に「ユニバーサルデザインを導入することが必要だと考えるのはどれか」について調査した結果の一部を、グラフで表したものである。**【資料Ⅰ】**を踏まえて、**【資料Ⅱ】**を見て**気づいたこと**と、**「ユニバーサルデザインを推進すること」**についての**あなたの考えや意見**を、あとの**条件**に従って書きなさい。

【資料Ⅰ】

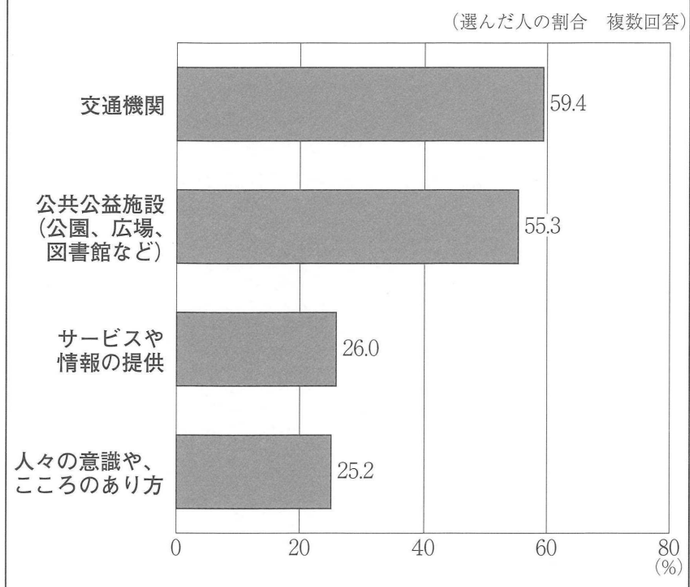
ユニバーサルデザインとは

すべての人の多様なニーズを考慮し、年齢、性別、身体的能力、言語などの違いにかかわらず、すべての人にとって安全・安心で利用しやすいように、建物、製品、環境などを計画、設計するという考え方のこと。また、あらゆる特性を持つすべての人のために生活・活動しやすい環境づくりを進めていくという考え方のこと。

（「ふくしまユニバーサルデザイン推進計画」により作成）

【資料Ⅱ】

ユニバーサルデザインを導入することが必要だと考えるのはどれか



（福島県「県政世論調査（令和３年度）」により作成）

条件

1　**二段落構成**とすること。

2　前段では、**【資料Ⅰ】**を踏まえて、**【資料Ⅱ】**を見て**気づいたこと**を書くこと。

3　後段では、前段を踏まえて、**「ユニバーサルデザインを推進すること」**についての**あなたの考えや意見**を書くこと。

4　全体を**百五十字以上、二百字以内**でまとめること。

5　氏名は書かないで、本文から書き始めること。

6　原稿用紙の使い方に従って、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。